
選

ばれるはずのない

婚約なのに

なぜか **溺愛**されています

～侯爵令息のトロ甘セックスで
孕ませるまで離してもらえません～

選ばれるはずのない婚約なのに
なぜか溺愛されています

～侯爵令息のトロ甘セックスで孕ませるまで離してもらえません～

Contents

第一話	婚約制度	3P
第二話	重なる夜伽	58P
第三話	誤解と好意	106P
第四話	手紙の送り主	189P
番外編	侯爵令息と新妻の甘い蜜夜	214P

第一話 婚約制度

エルドレシア王国では、男性が成人すると二人の婚約者を与えられる。そしてその二人を競わせ、よりふさわしい方が妻となる――。

そうすれば、一族が繁栄すると言われていた。

その慣習に倣い、成人した私にもその時がやってきた。

ふさわしい男性に嫁ぎ、選ばれるために努力し正妻の座を勝ち取る。それが女性の務め――なのだけだ。

（侯爵家との結婚なんて……絶対うまくいかないわ。そんなことをするよりもずっと手紙を書いていたい。文字を書いている間は幸せ……）

成り上がって伯爵の身分を手に入れた私の生家、エルセリア伯爵家はそれを維持することだけで精一杯。

けれど、あいにく私は貴族の結婚なんて興味はなかった。

貴族令嬢の肩書きを手に入れた途端、私は習い事を詰め込まれ、ふさわしい振る舞いをしろと厳しく躾けられるようになった。

今までの自由な生活がなくなり、屋敷に閉じこもる日々が増えた。

だけどそんな私にも、唯一手紙を書くという趣味があつた。

きっかけは今の屋敷に来たときに、偶然間違つて届いた手紙だつた。

どこの誰かもわからない、ただ「J」のインシヤルだけが綴られた手紙。筆跡から見
ておそらく男性だとは思うが、素性は分からない。

ただ、美しい筆跡の主人とやりとりを始めるようになってから、私は息苦しい日々を
忘れることができた。

手紙には時々花が添えられていたり、美味しいお菓子が添えられていたり……。

この手紙を書いた人は、きつととても優しい人なのだろう。他愛無い私の日常の話や愚痴にも丁寧な返事をくれた。そして私はいつの間にか「J」に好意を持ちはじめていた。手紙の相手だと分かっているのに。

もしかしたら、いつかは会えたらと思っていたけど……それはもう叶わない。

「いいか、フィオナ。ヴァルディアス侯爵家ではうまくやるんだぞ。我が家の命運がかかっているんだ」

「そうよフィオナ。あなたが選ばれれば念願だった侯爵家とのご縁ができるのだから。ユリウス様に必ず気に入られなさい。いいわね」

侯爵家へ送り出される日。

両親は私が望む言葉をかけてくれなかった。

（二人とも同じことばかり……私が愛されるようにとは願ってくれないのね）
がっかりしながら、馬車に乗り御者に出発を告げる。

窓から屋敷は見えただけ、私はあえて姿勢をそらすようにうつむいた。

これから私が嫁ぐのはヴァルデアス侯爵家。その嫡男、ユリウス。

貴族になって日が浅い我が家とは、あまり関わりがなかった家。私はよく知らないけど、両親があれだけ渴望しているのだから、大きな家なのだろう。

どうして私に縁があつたのかわからないけど、聞くところによると、もう一人の婚約者はユリウスの幼馴染であり同じく伯爵令嬢のマルグリットという女性に決定しているそう。

想像するに、ユリウスの妻にはそのマルグリットが決まっているのではないか——

ただ、貴族として体裁を整えるためにはもう一人誰かをあてがわなければならない。だから、弱小貴族の我が家に白羽の矢が当たった。

社交会でまともに活動もしていない。素養のない私ではマルグリットに、まともに勝つことなどできないだろうから。

(こんな茶番のために——。たった一人、心を許した人との縁も途切れてしまうなんて)

引き返したい私の心とは正反対に馬車は進む。やがてヴァルディアス公爵家に到着すると、重たい音を立てて馬車の扉が開いた。

「フィオナ様、到着しました」

「……ご苦労様、ありがとう」

—— ああ……なんて大きな屋敷なのかしら。我が家とは、何もかも違うわ。

見上げるほど大きなヴァルディアス侯爵家は華やかで美しかった。ただ今の私には、その華やかさも重たいだけだ。自分を縛り付ける牢獄に思えてならない。

「お待ちしておりました。ユリウス様をお呼びしますので中でお待ちください」

ドアマンに名前を告げると、中へ通してもらえた。ロビーも外観に相応しい豪華な造りだ。

やがて使用人が一人の男性——そして女性を連れて戻ってきた。

(あれがユリウス様……と、彼女は……?)

二人はゆつくりとエントランスの階段を降りてくる。まるで若い恋人のようだ。

女性は誰か分からないが、ユリウスと思しき男性の腕にずつとくつついている。おそらく彼女がマルグリッドではないだろうか。到着早々にこんなに見せつけてくるなんて、やはり二人の仲は確実なのだろう。

「初めまして。フィオナ・エルセリアです。本日からどうぞ……よろしくお願ひします」

「君が……フィオナ嬢か」

ユリウスと思しき男性は私をじつと見つめた。どこか感慨深そうな、なんとも言えない表情をしている。

「あの……?」

「……失礼したね。僕がユリウスだ。こちらこそよろしく頼むよ。こつちが……マルグリッド。もう一人の……婚約者だ」

「初めまして、フィオナ。よろしくね」

「よろしくお願いいたします」

「マギー、お客様の前だよ」

「だって、ユリウスの婚約者になれて嬉しいんだもの！」

マルグリッドはニコニコと嬉しそうにユリウスの腕を掴んだ。

見たところ、私より少し年下だ。可愛らしく甘える仕草は彼女のふんわりした雰囲気
にイメージぴったりだった。天真爛漫で女性らしい。

ユリウスも満更でもなさそうだし、やはりこの婚約は最初から出来レース——意
味なんてない。

「ねえ、ユリウス。私がフィオナの案内をしてもいい？」

「ああ、頼めるかい？」

「まかせて！ 何歳の時からこのお屋敷で遊んでると思ってるの？」

「そうだね」

「行きましょう、フィオナ。荷物は使用人達に任せればいいのよ」

「は、はい」

マルグリッドはそう言うと、私を先導して歩き始めた。

広い屋敷の中は正直一回見ただけでは覚え切れない。マルグリッドは慣れているせいか早いペースで説明しながら進むから覚えるのが大変だ。

「マ、マルグリッド様……あの、もう少しゆっくり……」

不意にくるとマルグリッドが振り返った。その表情はさっきまでの笑顔とは違う。

真顔で何か責めるように私を見つめる。

「あら、ごめんなさい。私は幼い頃からこのお屋敷に出入りしているから、つい早足になっちゃったわ」

「申し訳ありません……早く覚えられるように努力します」

「……あなた、本当に教養がないのね」

「え……？」

「物覚えも悪いし。愛嬌もないわ。どうしてこんな子がユリウスの婚約者になれたのか不思議なくらい」

(なに……？ マルグリッド様はどうしてしまったの？)

マルグリッドの態度は先ほどまでとはずいぶん違う。刺々しく、まるで見下すように私を嘲笑している。

一体何が起こっているのだろう。あまりにも驚いて何も言い返せない。

「一体どんな手を使ってユリウスの婚約者になったの？ あなたみたいな品格のない貴族が……きつと汚い手を使ったんでしょね。育ちの悪そうな顔をしているもの」

「え、あの……」

「でもおかげで私は楽だわ。あなたみたいな人が相手ならユリウスの妻になるのはそう難しくなさそうなもの。一年も必要ないんじゃないのかしら」

結婚相手の選定には一年を設けると決められている。その間に婚約者達はそれぞれ自分が妻に相応しいことをアピールしなければならぬ。

期間を待たずに終わるのは余程の時か、一定の条件が必要だ。

矢継ぎ早に刺々しい言葉をぶつけてくるマルグリッドに、私は何も言えなかった。本当にその通りだからだ。

おそらく両親は何かの手を使ってヴァルディアス侯爵家との縁談を手に入れたに違いない。全く不釣り合いな相手の家に入り込もうとしているのだから、そう思われても仕方ない。

それにユリウスとマルグリッドがすでに『出来上がった関係』なら、私はただのお邪魔魔虫だ。マルグリッドからすれば目障りなことこの上ないだろう。

「いいこと？ ユリウスの前で媚を売ろうつたって無駄よ。あなたが入る余地なんてないんだから。この屋敷では余計なことをしないでちょうだい。早く追い出されたいなら勝手にしてくれてもいいけど」

マルグリッドは吐き捨てるように言う。と案内も終わらないうちにさつきと背を向けて行ってしまった。

(とんでもないところに来てしまったわ……やっぱり、私には分不相応だったのよ)



婚約者に決まった女性は妻としての素質を試される。屋敷内の仕事を分担して管理したり、主催するパーティーの準備をしたり、将来的に妻になった時、きちんと仕事を遂行できるかの確認をされる。

けれどそれとは別にもっと重大なことがあった。婚約者との夜伽だ。

結婚後相性が悪かったりすると困るため、婚約者に体の適性があるかも見られるのだ。屋敷内の管理やユリウスのサポートも大事だが、これは別の意味でもっと大事だった。

婚約者に選ばれたあとはそれぞれ決まった夜に夜伽を行い、婚約者の相性を確かめる。

ユリウスは月に一度私の寝室を訪れることになっていた。その日が来てしまったら、私はどうしたらいいのだろう。

緊張を紛らわせるように私は屋敷の仕事に勤しんだ。

幸い、やることや覚えることは山ほどあったし、勝手の分からない屋敷の中は高いものに溢れていて緊張感でいっぱいになった。

ただ、マルグリッドと一緒に仕事をするのがなかったから、それについては有り難かったが、彼女は時々私が見たい資料を隠したり屋敷の使用人に私の悪口を吹き込んだりした。

彼女は幼い頃からこの屋敷に出入りしているから、入ってきたばかりの私と違って信頼されている。屋敷の人達もそれを鵜呑みにしているに違いない。

一年の期間を待たず、この婚約は終わってしまうのではないだろうか。そうなれば私は――。

そうしてついに、夜伽の日がやってきた。

湯浴みを終わらせ、ソワソワしながら部屋の中で彼を待つ。あれだけ時間があつたのにまだ決心がつかない。

(どうしよう、怖い……夜伽なんて言われてもどうしたらいいか分からないわ。何をしたらいいの？ 失敗してしまつたら……)

当然初めてのことで、知識も臍げでしかない。加えて相手は恋しい人ではなく、見知らぬ貴族令息。ユリウスは優しそうな人物だが、それでも怖さは変わらない。

ふと、手紙の存在を思い出した。実家から持ってきた荷物の中に忍ばせていた「J」からの手紙の数々。この屋敷に来てから、過去の手紙を何度も読み返し励みにしていた。

一瞬寝たふりをしてしまおうかと思ったが、そうすると余計に印象が悪くなるだけだ。観念して部屋の扉を開けに向かう。

「お待ちください。今開けます……っ」

扉を開けるとユリウスが立っていた。しかしなんだか申し訳なさそうな顔だ。

「遅れてすまない。ちよつと……色々あつてくるのが遅れてしまったんだ」

「そうですか……」

その言い訳を本気で信じたわけじゃなかった。ユリウスからしてもこの婚約は面倒なことだろうから。できれば私との夜伽なんてしたくないに違いない。

「この屋敷には慣れたかい。色々仕事があつて大変だろう？」

「はい。なんとか……色々覚えることはありますが、頑張ります」

「もし仕事が辛いなら教えて。極端に仕事の量を調整することはできないけど、最初のうちだから少しは融通を利かせられるから」

「大丈夫です」

辛いなんて言える立場ではない。いや、案外言ってしまった方がいいのだろうか。一年間も不毛な時間を過ごすなら、次の男性の元へ行ったほうがいい。彼だつてきつと、そう思っているはずだ。

でも私から進言なんてとてできない。私は所詮、家に言われてやってきただけの女だ。拒否権なんてない。

「フィオナ。大丈夫だよ。優しくする」

——ユリウス様にもどうにもできない事情があるのよね。

それなら少しでも早く、この行為を終わらせてしまったほうがいい。

ベッドに二人で上がり、ユリウスが私が羽織っていたシルクに手をかける。いよいよ始まるのだと思うとドキドキして勝手に体が震えてしまう。

「怖いんだろう。無理をしなくていいよ。君の気持ちは分かっているつもりだから」

「大丈夫です……ちゃんと、できます」

声が上擦ってしまう私の頬をユリウスがそつと指で撫でた。優しい手つきに思いのほか安心して、体から少し力が抜ける。

「これは練習だ。痛いことはしない。もちろん、君が嫌がることも。僕に身を任せ
て……」

羽織がするりと肩から落ちた。曝け出された肩にユリウスの指が触れて、くすぐったくピクンと動いてしまう。

伯爵家から持ってきた一張羅のネグリジエを着ているが、侯爵家からしてみればきつと粗末に見えるのだろう。それに私の体は褒められるほど豊満ではない。きつとユリウスはがっかりしているはずだ。

「……っ」

「君は怖がっているのに……ごめんね。でも僕は君を美しいと思うよ。とても……綺麗だ」

「え……？ あ……っ」

ユリウス様の指がつつ……を肌を撫でたかと思うと肩から胸元に指が移動する。谷間を指先で撫でられるとくすぐったくてつい身じろいしてしまう。

(聞き間違い？ 今私を綺麗だと言った？ 彼が？ どうして？)

「あの……っあ、んん……つくすぐつたい、です……」

「声も綺麗だ。そのまま……君の声を聞かせて」

ユリウスが私の体を支えながらゆつくりと押し倒した。そのまま胸元に口付けたかと思うと、軽く吸い付きながらちゅっ、ちゅつとリップ音を立てる。

恥ずかしさでいっぱいだつた。いきなり肌を見せることもそうだし、こんな場所に口付けられるなんて。音が聞こえるたびに柔らかい唇が肌に吸い付いて、赤い痕をつけていく。なんだか彼の所有物になっていくみたいだ。

「ふ……う♡♡あ……っ！？ ん……っ♡んん……っ♡ユリウス様……あ、あの……っ私は何をすれば……」

「これは夜伽の練習だ。夜伽はね、女性が気持ち良くならなないと始まらないんだ。だから君は気持ち良くなるだけでいい。僕に身を任せて……感覚に集中して」

「ひゃう……っ♡」

唇が肌の上で移動してネグリジェを捲り上げる。肩紐が降りて胸の膨らみが露わになると、恥ずかしさから咄嗟に手で隠してしまった。

けれど、すぐにそれが間違いだった事に気がつく。

「あ……っごめ、ごめんなさい……っ」

「いいんだよ。君の反応は当然だから。恥ずかしいならそのまま隠していてくれて構わない。でももし僕に触れられてもいいと思ったら手を外して」

労るように唇がまたそつと谷間に落ちた。私の手を避けるように、ユリウスは口付けを落としていく。

だけど、さつきと違って時折ペロりと舌で肌を舐めたり、強く吸い付いたりした。そうするとなんだかドキドキして、隠した場所がきゅつとしこりのように硬くなっている。

(なに……これ、なんでこんなことに……)

最初はくすぐったかったのが段々と気持ち良くなっていく。ユリウスの唇が触れると突起がピクピクして、とてもじつとしていられない。

恥ずかしいのに触れてほしい。これ以上触れられたら一体どうなってしまうのだろう。そんな期待で胸が埋まっていく。

「んっ……あ♡♡……ああっ♡♡ユリウス様……これはどういう、意味があるんですか……？ あ……っ♡♡んん……ふ♡♡はあ♡♡んあ……っ♡♡」

「こういうことをするのは初めて？」

「はい……」

「……良かった。じゃあ、僕が始めてなんだね」

何が良かったのだろう。

ユリウスは嬉しそうに顔を崩すと、胸を隠す私の指を舐めて先端をしゃぶった。ちゅぱちゅぱと指先を舌で舐めて啜えているのを見ると、なんだかいやらしい気持ちになつてしまう。

「それはね……お互いの体を知るためだよ。そしてこれはフィオナの体を慣らすための大切な作業なんだ。夜伽は準備をきちんとしないと体に負担がかかるからね。分かったかい？」

夜伽が最終的にどんなことをするのかぐらいは知っている。殿方の男根を女性の体の中に挿れる。そして子種を出してもらい、後継を作らなければならない。

この婚約が決まった時に、両親から散々、必ずユリウスの子を妊娠しろと言われた。だから夜伽はものすごくプレッシャーだ。これが練習なのだと言われても。

（ユリウス様……優しい。マルグリッド様がお好きだから私の体なんか触りたくないはずなのに……ずっと気を遣ってくださってる……）

これが本当にちゃんとした婚約ならこんなにも負い目を感じることはなかったのに。ひよつとしたらユリウスを好きになることもできたかもしれない。

だけど変な勘違いをしてはいけない。彼にはマルグリッドというちゃんとした婚約者がいるのだから――。

「……さつきから見えているよ。隠せていないけど、僕に触れて欲しいのかい？」
「んあっ♡」

不意に開いた指の隙間に舌を伸ばされて突起を突かれた。柔らかいものがつん、と突くとお腹の奥がきゅんと疼く。

「ここも可愛い。小さくてコロツとしてて……綺麗な蕾みたいだ」

「あ……っ！？ んっ……ユリウスさ……っふ、んうっ♡そんな、そんなところを舐めるなんて……っひゃ♡」

「大事なことだよ。どう？ これは気持ちいい？」

れろれろっ♡と舌先が突起を掠めるとおもわず声が溢れてしまう。

くすつたくて気持ちいい。舐められているのは胸だけなのに、全身が心地良くなっていく。胸を覆っていた手のひらはいつの間にか解けてしまっていた。

「気持ちいい……、です♡はう……つあ……つ、あ、やだ♡や……んんっ♡ごめんさない、体がビリビリつてして……♡」

「正常な反応だ。ここはね、敏感だから刺激するとこんなふうにしこりみたいに硬くなるんだ。たくさん刺激してあげると気持ち良くなってくる」

「んやあ……っ♡」

指が解けた場所に唇が近づいたかと思うと、そのまま突起をぼくんと飲み込んでしまう。甘い痺れが体を痙攣させた。だけど悪い感覚じゃない。そんなことされたのは初めてなのに、舐めて吸われると夢見心地のような気持ちになる。

ちゅ……っ♡れる……っ♡ちゅぶっ♡れるお……っ♡ちゅ♡ちゅむ……っ♡♡

片方の突起を舐めながら片方の突起は指で挟んでコリコリと弄られた。

その場所をいじられると目に見えて突起が突き出してくるのが恥ずかしい。

「吸いやすい形になったね。こんなにコリコリして……フィオナの乳首は気持ちいいことが好きみたいだ」

「あつ、あ……っ♡♡あ、はずかし……っ♡♡ごめんなさい♡体が勝手に……なつてしまうんですっ♡あ、あ、んん……っ♡」

「いいんだよ。気持ち良くなるのはいいことなんだから。どうかな、他に体の中で変わった場所はある？」

「ん、ふうっ……♡お腹が……変なんです♡♡あふ、さつきから……うずうずして……♡♡」

お腹の奥というか、股の間だ。けれどそういうふうに伝えるのは恥ずかしかった。今までこんな感覚になったことがない。小水が出る間近の感覚に似ているかもしれない。

「それはもしかしてここかな」

ユリウスが指で私の下腹部の上をそつと押す。まさにその通りで、私はうんうんと頷いた。

「ここにはフィオナの子宮があるんだ。赤ちゃんを作るところだね。フィオナが気持ち良くなるとここが赤ちゃんを作る準備を始める。そうすると体が気持ち良くなっていくんだ」

まるで子供に説明しているみたいだ。けれど余計にそのせいで恥ずかしさが増す。

「そう、なんですね……ごめんなさい、私何も知らなくて……」

「大丈夫。わからないことは僕が教えるから。フィオナも知りたいことがあつたらなんでも聞いて」

「では、あの……さつきから股の間が……その、なんだか変なんです……痛いとかじゃないんですけど……」

「それは放っておくと良くないね。一度見て確認しようか」

ユリウスは確認するように私に視線を合わせた。それはその場所を見るといふことだろう。夜伽をするのだから性器を見られることは覚悟している。

ネグリジェの裾を捲り上げてショーツが露わにされるとつい膝をギュツと閉じてしま
う。けれどこれは大事な仕事のうちのひとつだ。夜伽を拒否なんてしたら、それこそすぐ
に追い出されるだろう。

恥ずかしさを堪えて少し膝の位置を戻すと、ユリウスが優しく太ももを撫でた。

「安心して、フィオナ。これからするのは気持ちいいことだけだから」

「はい……♡」

ショーツに指をかけられてゆつくりと脱がしていく。隠すものを無くした場所は何ん
だか弱点を曝け出しているみたいな感じで心元ない。それにとっても恥ずかしかった。

「フィオナ、膝を立てて、少し足を開いてくれるかな。中をよく見たいから」

「分かり、ました……♡」

指示の通りに足を開く。羞恥心で顔が熱くて堪らない。ユリウスの視線がそこに注が
れていると思うと秘部がヒクヒクと動いてしまう。

(なんだかひんやりするわ……さつき湯浴みをしたから……？ 広げると余計に股がズ

キズキしてしまう……♡)

「フィオナ。気付いているかい？ 君のここが濡れてるよ」

「え……っ」

「ほら……」

ユリウスが秘裂を下から上へ指で撫でる。すると明らかにぬるぬるしたものが指にまとわりついた。まさか、気が付かないうちに漏らしてしまったのだろうか。

「あ……ごめんな……っも、申し訳ありません……っ私……気が付かなくて……っ」

「ああ、違うんだよフィオナ。これは愛液と言って、気持ち良くなると体から分泌されるものなんだ。知ってる？」

「あい……え、き……ですか……？」

「そう。女性の体は男性器を体の中に挿れるために潤滑油代わりにこれが出るようになってるんだ。汚いものじゃないんだよ。大切なことなんだ」

そうだったのか。全く知らなくてもものすごく焦ってしまった。だけどもぬるぬるするし、触られるとやっぱり恥ずかしい。普段見られない場所を見られているから余計に。

「フィオナは初めてだから、もつともつと濡らさないといけないね」

「あ……っ♡」

再び胸の突起に吸い付かれたかと思えば、股の間に指が触れてくちゆくちゆと音を立てる。ユリウスの指が秘裂をくすぐるように撫でるとまたお腹が疼き出す。

「夜伽ではここにもたくさん触れるから、よく慣れておこうね。緊張が解ればもつと気持ち良くなれるよ」

「んっ♡んん……はい♡♡あ……ひッ、ん♡♡」

「大丈夫。フィオナはとても上手だ。気持ちいい場所があったら教えてくれるかい？」

「は……っあ、んやああっ♡♡」

指先が触れた途端突然ビリッと体が痺れた。ユリウスの指先が触れた場所に何かあったのだ。

「ここで反応があつたね。もう一度やってみようか」

指先がまた同じ場所を今度はツンツン、と突つく。また体がびくと跳ねて下半身が硬直するような感覚に襲われた。

「ああつ……つ！？ それ、だめです……つんあ、あぁっ♡♡なんか変……つそこ変です……っ♡♡」

「ここはクリトリスと言つてとても敏感な場所なんだ。フィオナのは少し見えにくいかな……埋もれている感じがするね。ここは神経が集まっつていて少し触るだけでもこんなふうになるんだ」

スリスリ……スリスリ♡♡つん……っ♡♡つんつん♡♡スリスリスリ……っ♡♡

「んやあつ、そ……そんな、だめっ♡撫でちゃ……ひ、う……っ♡♡」

「我慢しなくていい。フィオナはどう感じる？ ここは嫌？ 触つて欲しくない？」

そんなことない。そこに触れられると恥ずかしいのに気持ち良くなつてしまう。突起を少し指が掠めるだけで体が痺れて、体が快感に侵食されていくのが分かる。

「んう、あ♡やじゃない……です♡♡気持ちいい……つ、そこ触られるの好きです……♡」

「……良かった。フィオナが気持ち良くなれるように優しく触るから、気持ちいい時は声を出して教えてくれるかい」

「んひ……っ♡♡」

唇が胸に吸い付いてねつとりしゃぶる。指はクリトリスの上をほんの少し触れたかと思えば、突起の周りをくるくると円を描くように動いたり、指先でカリカリと引つ掻いたりされて抑えていた声が溢れてしまう。

気持ち良くてつい腰を振って逃げてしまおうとすると、ユリウスは執拗にそれを追いかけて刺激した。優しいのに私が気持ち良くなること以外は許してくれない。

「あ♡♡あ、ああ……っ！？ ユリウスさまあ……っ♡だめっ、気持ちいいです♡クリトリス気持ちいい……っ、んんうう……ひゃあんっ♡あ……っトントんってしちやだめですッ♡♡ひっ……やあんっ♡♡」

「こうしないと愛液が出てこないんだよ。フィオナのここがもつとぐしょぐしょになるぐらい濡らさないと……ちよつと気持ち良くなるけど、我慢できるかい？」

「ひゃ……っ♡♡」

いきなりキュツと肉芽を摘まれた。体がピンつと硬直して、頭の中がさつきよりもぼんやりする。もつとして欲しい。でももつとされてしまったら気がおかしくなってしまうそうだ。

「やあつ!？ だめです……っそれだめ♡へんになる……っ♡ユリ……っ、ユリウスさま♡ん。あ、あ♡クリトリス引っ張らないでください……っ♡あ、あっ♡」

「ここが硬くなってきたのが分かる？ ここも乳首と同じで興奮すると充血してこんなふうに硬くなるんだよ。フィオナのクリトリスはとても敏感で優秀みたいだ」

「あああ……っ♡」

「でもまだ足りない。これは準備運動だからね。フィオナの気が触れてしまうぐらい気持ち良くしないと……僕のは入らないんだ。だからもう少し頑張ろうか」

キュッ♡♡こりゅっ♡くにつ♡♡コリコリっ♡♡こりゅっ♡♡

指に愛液が絡み付いてぬるぬる滑る感覚が気持ちいい。触れれば触れるほど、クリトリスが敏感になっていくみたいだ。胸をしゃぶられながらクリトリスを撫でられると秘部がどんどん濡れていくのが分かる。

(ダメ……つきつきよりも気持ち良くなってきた♡クリトリスコリコリされたら変になっちゃう♡ユリウス様の前なのに……っ変になる……っ♡)

「あ……っ♡♡ユリウス様ッ♡もう、だめ……っ♡それ、だめえ……っ!？ お願いです、もうおかしくなつてしまいます……っ♡おッ、お許し……っください……っあああ!？」

突起がちゆるぢゆるといやらしい音を立てて吸われる。散々弄られて感度が高まった状態のクリトリスがにゅちにゅちと蜜を絡めながら扱かれ、重ねていた我慢が限界を迎えた。

「だめ……っダメえっ♡んああああ……ッ♡♡」

ビクビクと痙攣しながら体が大きくのけ反った。一瞬頭の中が真っ白になって何も考えられなくなってしまう。何が起こったのか分からない。ただ全身を心地よい快感が包みこむような感覚に飲み込まれていく。

「はあ……あ……？ ユリ……ウス、さま……？」

「ちゃんとイけたね。良かった。安心したよ。今のはね、フィオナがたくさん気持ち良くなつて限界を超えたつてことなんだ。気持ち良くなつてたくさんイくのはいいことなんだよ」

「いいこと……♡」

では間違っていないのか。こんなに気持ちがいいのにどこか背徳感を感じるのは行為が初めてだからなのか。それとも人の恋人と交わっているからなのか。

ユリウスの態度で勘違いしてしまいそうになる。彼の仕草や言葉は、まるで恋人へ向けるそれのように思えた。

「そう、いいことだ。おかげでここがたくさん濡れてきた。分かるかい？ さつきよりも愛液がたくさん出てきたよ」

「あ……♡」

くちゆくちゆ秘部を撫でられると、明らかにさつきよりも大きな音が鳴って滑りがよくなっていた。内側から何かが滲み出すような感覚がして、確かに自分の中から溢れたのだと分かった。

（ユリウス様……まだ挿れないの……？ 子種を出さなければ夜伽は終わらないのに……もうずっとこんなことばかり……）

「ユリウス様、もう……つもう挿れてくださって大丈夫ですから…準備運動はもう結構です……♡ちゃんと、濡れました……♡」

「……いけないね。君は初めてなのに、そんなことを言ったらおねだりに聞こえてしまうよ」

「あ……っ!？」

いきなり秘裂の間に指が埋まった。ぬかるみの中に足を埋め込むように、ユリウスの指がズブズブと入っていく。

「指も入らないようじゃ僕のものが入らないよ。それとも早く終わらせたい？」

「あ、ああ……っ指、はいっっちゃ……♡♡あ！？ 中で動いて……っ♡」

「夜伽は子作りするためだけじゃないんだ。相手に体に触れて……仲を深め合う行為なんだよ。分かったかい？」

にゅぐぐ……♡♡ぐちゅ……ぐちゅっ♡♡ぬぢッ……♡♡ぬぢッ……♡♡

「わか……っ♡わかってます♡はふ……っ♡ん、んううっ！？♡♡」

「指一本でこんなにキツイんだ。僕のはこれ以上に太い。中の奥までよくほぐしておかないと……」

指が中でぐちゅぐちゅ音を立てて動く。お腹を押し上げられて、中からいやらしい音が響いてくる。指はいつの間にか根本までしっかりと入っていた。

(そんな……♡ユリウス様の指があんなところまで入って……っ♡音、すごい……っ♡
恥ずかしい……っ♡)

お腹の奥に何か埋まっている感覚でもどかしくなる。だけど動かされると気持ち良くなってしまうってどうしたらいいか分からない。ユリウスは私の秘部を見つめながらひたすら指を動かして中を拡げていく。

「フィオナのここが濡れて……キラキラしてすごく綺麗だ。朝露に濡れた薔薇の花びらみたいに赤くなっているね。この蕾も大きく膨らんできて……もう咲いてしまっそう
だ」

そういうとユリウスは体を屈めて頭を股の間に近付けた。指を出し入れしながらクリトリスにそつと顔を寄せると、突起にちゅつと口付ける。

「んい……っ♡♡」

「ああ、中が締まった……フィオナが感じると中が動くのが分かる。もう一度やってみようか」

「ひううっ?! やあ……っ♡♡」

ちゅ……っ♡♡ちゅっ♡♡ぷちゅ♡♡ちゅば……っ♡♡ちゅううううっ♡♡

「ふあッ♡♡あッ、だめッそれやら……っ♡お……♡♡吸わないれくだき……っ♡

ひあ……ッ!?? や、だめです♡クリトリスも中もへんになる……っ♡♡」

「フィオナ、それが気持ち良くなるということだよ。気持ちいい時はイくと言って。僕に教えてくれる……?」

肉芽が舌に当たるとどくどくと鼓動を打っているのが分かる。舌のざらざらした部分に当たるたびに体の中を稲妻が走って、痙攣が止まらない。何がなんだかわからない私はユリウスの言うとおりにするしかない。

「ひう……っく♡んん……っあっ♡気持ちいいっ……イく♡♡あっ、イきますっ♡♡

イっちやうう……っ♡また気持ちいいのきちや……っ♡♡」

快感が限界に達した瞬間、膣内がぎゅう、と指を締め付けた。体がいつの間にかじつとりと汗ばんでいる。果ててしまった私のクリトリスをユリウスが愛おしむようにちゅぷ……ちゅぷ……と唇で優しく喰んだ。

「フィオナ……僕に身を任せて……もつと気持ち良くなって……」

「やら……、あ♡♡らめえ……ユリウスさま♡そんなすぐにしたら……や♡♡あ、だめ……また、イク……♡」

「何度でもイつて。フィオナがイクところをもつと見たいんだ」

「あつ、やああ……らめ♡♡また……つ中がへんになるんです……つ舐めたらだめえ……だめえ……っ♡♡」

私がいくら懇願してもユリウスはやめてくれない。執拗にクリトリスに吸い付いて指を中にかき回す。

夜伽でこんなことをするなんて思わなかった。痛くなって、血が出て、気持ち良くなくなるなんて考えたこともない。頭がふわふわしてだんだん天国に近づいているんじゃないだろうかと思ってしまう。

「すごい音だ……フィオナの中が喜んでいる証拠だよ。さあ、もう一度イこうか」

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡♡ぐち、ぐち♡♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡♡

「あ♡……つやだ♡♡♡ふお……♡♡♡やあ♡♡♡イく♡♡また♡♡ビクビクきちやうう♡♡♡あ、ああ、もうだめ……んううう……♡♡♡」

膣奥からじゅわ……と熱いものが滲み出ていく。中から溢れたものが指を濡らしている感覚にんだか泣きそうになってしまった。

体が熱くて堪らない。全身がピクピクしてずっと小刻みに震えている。体から力が抜けて何もできそうになかった。

放心しているとユリウスはクリトリスから唇をそつと離した。唾液を纏って剥き出しにされたクリトリスはぬらぬらと光っている。いや、私の愛液かもしれない。

触ったこともなかった場所は淫靡に赤く腫れ、花の蕾のような清廉さはない。それなのにユリウスは花でも愛でるようにうつとりと私の蕾を眺めている。

（ああ……あんないやらしい姿にされて……♡私おかしくなってしまったの……？ ユリウス様……どうしてこんなふう……私のことなんて大切にするはずがないのに……それともこれは意地悪でしているの……？）

「とても素敵だったよ、フィオナ……中も良くほぐれて柔らかくなっている。頑張ったね」

「はふ……♡ありがとうございます……ごぎいます……♡」

「それじゃあ次は下半身を少しほぐそうか」

「んん……っ♡♡」

不意に中から指が引き抜かれた。やっと解放されたというのに、膣内はまだ疼いているみたいだ。指を探し求めて中が蠢く。逃げていく熱を寂しく思ってしまう。

「ただどそんなことを考えたのは一瞬だった。ユリウスが私の膝を掴んだかと思うと左
右に大きく開いたのだ。」

「きゃあ……っ♡あ、だめ……っ！？ ユリウス様何を……っ♡」

「これからしばらく足を開いた体勢をとるからね。いきなりしたら体を痛めてしまうだ
ろう？ マッサージをしてあげるから力を抜いて」

そんなこと言われても。力を抜くどころかますます力が入ってしまう。

何しろ下半身には何も纏っておらず、こんなに大きく開かれてしまつては大切な場所
が丸見えになってしまう。

さつき指を挿入されて濡れてしまつた場所も、興奮しているクリトリスも全て。

だけどユリウスの力は意外にも強く、私が閉じようとしても叶わなかった。

開かれた場所に視線が注がれるとヒクヒクと蜜口とクリトリスが震えてしまう。私は
なんとかそれがバレないように体をじつと抑えて堪えたつもりだった。

「フィオナ。下の口が動いているよ」

「……っ♡」

「見られて感じてしまったのかな。恥じることはないよ。生理的なものだろうから。でも……そうだな。君自身が見られて感じてしまっているということも考えられるけど」

「……っいいえ、いいえ……♡そんなことは……っ♡」

「ない、と言いたい。けれど実際は、ユリウスに見られて興奮しているように思う。」

「こんなはしたない格好をさせられているのに内心はこの先の快感を期待してしまっている。また気持ち良くしてくれるのではないかと。」

「そうかい？　なら気にしなくても大丈夫だね」

「膝裏を持たれたままグツとさらに足を広げられる。私は秘部を曝け出すような体勢になり。濡れた蜜穴がさらに収縮した。」

「フィオナのここは花びらみたいでとても綺麗だね。ああでも、ぐしょぐしょだ」

「……っユリウス様、お願いです……もう、これ以上は……っご容赦ください……っ」

「まだ準備運動が終わったばかりなのに、もう終わらせてしまうのかい？ このまま放置してしまつたら君はきつともどかしくて眠れなくなるんじゃないかな」

ユリウスが羽織つていたガウンの腰紐を解いた。ふかふかのガウンがシーツの上に落ちると、引き締まつた体が顕になる。

ユリウスはがっしりとした体型ではないけれど、背が高くてすらつとしていている。服を着ている時は分からなかつたけれど、裸になるといかにも男の人だ。

それに……。

(あれが……ユリウス様の……)

生まれて初めて見る男の人の肉棒はまるで木の棒のように太かつた。

それに見た目はユリウスの穏やかな雰囲気からは想像もできないような肉肉しさだ。どことなく赤黒くて、天井へ向くように伸びている。先端は丸いけれど小さな穴があつて、形容し難い形だ。

「君の大事なところをたくさん見せてもらつたからね。僕のも見せないと」

「あ……っ♡」

ユリウスは男根をぴとりと秘部に触れさせた。生まれて初めて触れた男のものはとても硬く、本当に木の棒を押し付けられたような感じだ。

濡れた肉襖の中に押し付けられるとぬちゅ……ぬちゅ……♡と先端が愛液で濡れている。ユリウスはまるでそれを楽しんでいるように見えた。

「あ……っ♡♡そんな……ッん、擦っちゃ……や♡やあ、あ……汚れてしまいますか
ら……っ♡♡」

「フィオナのここはとても綺麗だよ。汚れてなんかいない。ぬるぬるしてすごく気持ちいいね……中はもつと気持ちがいいんだろうね」

「中って……あ、え……っ♡」

「この中だよ」

更に足を押さえ付けられたかと思うと、腰を進められ肉鉾が蜜口に埋まる。あつという間に先端が埋まってしまい、何が起こったのか分からなくなった。

「力を抜いて……ゆつくり挿れていくから」

「え、あ、うそ……っ♡なん、っで……あああっ！？ あ、や……♡♡」

ユリウスの肉鉾がゆつくりと中に埋まっていくのが見える。そうすると膣内が拡げられて中が突っ張るような、太いもので圧迫されている感じがした。

無理だ。とても入らない。あまりに苦しくて涙が溢れてしまう。

「無理……っ無理です♡だめ……ユリウス様、いやあ……っこわい♡お腹苦しいの……っ♡もう入らない……っ♡」

「……ごめんね、怖がらせてしまつて。初めてだから驚いてしまつたんだね。傷つけたりしないから安心して。深呼吸をしてくれるかい」

怖さを紛らわせたい一心で私はそれに従つた。だけど気持ちが少し落ち着くと、自分の体の中にある大きな存在を余計に意識してしまふ。

肉棒は蜜壺いっぱいに広がつてとても動く余地なんてない。本当にこれで子種がもらえるのか不安だ。

「うん……さつきよりも中が柔らかくなったね。大丈夫、怖がらないで……僕は君を気持ち良くしたいだけだから。フィオナも気持ち良くなりたいてって思ってたんだ」

「つでも、どうすれば……」

「リラックスして……すぐによくしてあげるから」

するとユリウスの指が再びクリトリスを撫でた。散々弄られた後の敏感になった蕾は、ビクツと揺れたかと思うと反射的に肉棒を締め付けてしまう。

そのまま先端を引つ掻くようにコリコリと連続して刺激され、さつきまでの恐怖が一瞬で快樂に塗りつぶされた。

「くひ……っ♡あ、はああ……ッ？ ひ、あああっ♡んあッ♡おひ……そこだめっ♡♡感じちゃうう……ックリトリスだめ……っ♡今はだめ、です……ッ♡♡」

「フィオナはクリトリスを触られると気持ち良くなるだろう？ こうすれば痛くならずに気持ち良くなれるよ。ほら……中がうねってぬるぬるが溢れてきた……」

コリコリッ♡♡コリコリコリッ♡♡コリコリコリコリッ♡♡

(挿れたままクリトリス触られるの気持ち良すぎる……っ♡中がきゅうきゅう締め付けて……っユリウス様の形が分かっちゃう……っ)

「ああん♡きもちいい……っもう気持ちよく、なりましたからっ♡♡もうっ♡だめ……っ♡やらやらやら……っ♡いくんっ♡♡いぐっ♡♡いくう……っ♡♡」

あまりの快感に絶頂してしまい腰がグネグネと揺れる。視界がぼんやりして、緊張が抜けて楽になるどころかかえってユリウスのものを締め付けてしまい、中がどんどん敏感になっていく。

「すごい締め付けた……っどうか、フィオナ。さつきよりも楽になったかい？」
ユリウスが私の足を広げながら結合部をじつと見下ろした。

「はへ……♡♡な……っへ、まひゅ……♡きもちいい……っナカが……っびくびく……っう……っ♡」

「上手にイけてえらいね。正直君はこういうことには不快感を抱くかもしれないと思っていたんだけど……っ気に入ってくれたみたいで良かった」

ユリウスが何か喋っている。だけど頭がふわふわして何も考えられない。腰がゆつくりと動いて、竿が行ったり来たりしながらぬちゆぬちゆ音を立てる。

痛みはもうすっかり消えていた。きつくて苦しい感じは相変わらずだけど、動くとなぜか気持ち良くなっている。

(なんで……気持ちいいの……? こんなに大きいのに……先っぽが奥に当たってる……♡ナカ、気持ちいい……♡)

「フィオナの中……つすぐ気持ちいい……これが月に一度だけなんて、もったいないな。せつかく一緒に暮らせるようになったのに……っ」

「く……ッあ♡♡あ、んんっ……♡や、ユリウスさッ……熱いの♡♡中が熱くて……っひあ♡♡あんっ♡♡気持ちいい……おっ♡は……あ、あっ♡♡また変になるう……っ♡」

「ああ……っ君はそんな顔をするんだね。フィオナの気持ち良くなってる顔……っもつとよく見せて。もつとたくさんイって……っ」

突如、前後に揺れていた私の体をユリウスが抱きしめた。体をくっつけ合いながら腰をぐりぐりと奥に届くように擦り付けられると、チヨロチヨロ……つと秘裂から雫がこぼれ落ちる。

「今、何か漏らしたね……つこれは何かな？」

「んあ……つは、あん♡わかんや……つああ♡♡あああつれひや……つ、止まらな、やあ……つ♡♡」

膣内を掻き回されると結合部からぴゅっ、ぴゅっ♡♡と飛沫が吹き出た。初めての夜伽なのは何てはしたないのだろう。だけどユリウスはとても嬉しそうで、まるでそれもつと見せてとでも言うように更に腰を回す。

「嬉しいな……つこれはね、潮吹きと言つて膣の中で気持ち良くなると出てくるものなんだよ。フィオナがちゃんと夜伽ができてるつていう証拠だ……つ」

ジュプッ♡♡ジュプッ♡♡ジュプジュプッジュプッ♡♡ジュプッ♡♡ジュプッ♡♡

「いっ♡あ……やら♡れりゅ……れひゃあっ♡♡ちゅよいい……っ♡♡もうっ、らめ
きもちいい……っ♡♡いぐ、イク……っ♡♡はへ……っ♡♡おっ♡またイクう……ユリ
ウスひゃまつ♡わたしどうなっっちゃうの……っ♡♡こわい……おかしくなっっちゃう♡♡」
「心配しないで……っこれはフィオナが僕の奥さんになる大事な準備だから。大丈夫、
僕が全部受け止めてあげる……っ」

「ひううっ♡♡あ、あ……なん、て……っ??♡♡ああっ♡♡だめっ♡♡もうだ
めえっ……いッ♡♡やらっ、これ以上は……っあっ、あっ?! 待っ……や……っ!？」

腰を振る速度が早まったかと思うとユリウスが私の体を抱きしめながら深い接吻を落
とした。獣みたいに激しく腰を振りながら、舌を絡められてもう何がなんだか分からな
くなる。抱きしめられて身動きが取れないまま、唇と陰部を両方侵されて頭がくらくら
した。

「フィオナ……っフィオナ……、君の中に、出すね……っ受け止めて……っ」

「ひう……っ♡♡ああ♡♡ふ、あっ♡♡おっ！？………にゃに………つあッあつアッあつ♡♡あつい………つなんか出て………つふあああつ♡♡♡♡」

びゅくッ♡びゅくッ♡びゅ——ッ♡♡どびゅ♡どびゅ………っ♡

どくん、どくんと脈打ちながら肉棒から何かが溢れ出した。じんわりとお腹の中で温かいものが広がっていくのが分かる。それが何かは分からない。ただ気持ちよくて達すること思考が回らなくなっていく。

「これが僕の子種だよ………フィオナの中にたくさん入った。分かるかな………っほら、一番奥に出てるのが………っ」

「あう………あ♡♡ふあ………こ、だね………？♡♡」

「そう………フィオナが僕の赤ちゃんを産むための元になる大切なもの。フィオナが僕を気持ち良くしてくれたからこんなに出たんだよ」

ユリウスの手のひらが私の頬を撫でて優しく口付ける。まるで恋人がするみたいに。

夢現の中じんわりと包み込まれるような余韻を味わった。最初はあんなに苦しかったのに今はこんなに気持ちいい。ユリウスのものがまるで最初から一つだったみたいにぴったりと密着している。

「ん、ふうっ……♡♡んちゅ、は……う♡ちゅ……♡んう♡」

「フオオナ……もう一度だけ、君の中に出させて……」

「んんっ……♡ひ、ああっ??♡♡」

一番奥まで入っていたものがギリギリまで引き抜けたかと思うと、一気に最奥を突き挿した。上から突き挿すように肉棒を打ちつけられて呼吸をするのもままならない。

「あっ、ああっ♡♡らめ、んお……っ??♡♡おっ♡は……っ、なんれ♡♡あ、らひたの……っ??♡あああ……ッ♡ジュポジュポしてるうっ♡んおっ♡♡」

「一回だけじゃ確実に妊娠するか分からないだろう……っ!?!? だから、何回も射精しておかないとね……っ」

何回も射精しなければならない。それはこの快楽を何回も受けなければならないということだ。今でさえこんなふうになっているのに、これ以上はどうなってしまうか分からない。

腰が揺さぶられるたびに中でユリウスの竿がズルズル動いて音を立てる。こんな激しい動きをする人だなんて思わなかった。こんなまるで、本気で孕ませるみたいなの——

「これから君との夜伽が一層楽しみになったよ……っファイオナにもそう思って欲しいな。君が僕との夜伽を待ちきれなくなるぐらい、好きになってくれたらいいのに……っ」

「うあ、あ、なんれえっ??♡♡ユリウスひゃ、はげひいつ♡ひあ……おっん、ああ……っ♡♡ユリウスひゃまにはっマルグリッドしゃまが、イヤ、あつ、ああつ……イぐっ♡イぐ、う……っ♡♡」

ぬぼっ♡♡ぬぼっ♡♡ぬぼっ♡♡ぬぼっ♡♡びゆる……♡♡びゅっ……♡♡びゅー……っ♡♡

絶頂で全身がガクガク揺れる。それを押さえつけるようにユリウスが私の手をぎゅつと握って、膣奥でまた子種が吐き出された。

余韻だけでも気持ち良くて仕方ないのに、彼の何もかもが気持ちよくさせてくる。意識が朧げなまま何度も何度も行為は続いた。

「はあ………♡はー………♡あ………？ は………へあ………♡♡」

「………少し疲れさせちゃったかな。初めてなのに………ごめんね。君が可愛くてついやりすぎてしまったみたいだ」

肉棒が中からずりりと引き抜かれた。何度も射精されたからか、抜けた瞬間とぶ………と、とろとろしたものが蜜口からこぼれ落ちる。

激しいセックスでベッドの上は乱れ、綺麗に整えられたシーツはいつの間にかぐちゃぐちゃになってしまった。

ユリウスはぼんやりする私を見て、満足げに微笑むと横に寄り添ってちゅ、ちゅ、と何度も口付けを落とした。

疲労と快感で体力がすっかり削られてしまったためか、途端に瞼が落ちてくる。もう何も考えられなかった。

「フィオナ……心配しないで。僕はずっと——ん？ ……これは。フィオナ……君は……」

第二話 重なる夜伽

「ああ、可哀想なユリウス！ こんな女と夜伽させられて、さぞや苦痛だったでしょうね」

ユリウスとの夜伽が終わった次の日。

ユリウスは朝まで私と一緒にいてくれた。私の体を丁寧に拭いてくれて、「昨日はたくさんしてごめんね」と労うように口付けた。

気が進まない夜伽だったけれど、終わってみればそれほど悪いものではなかったように思う。むしろ気持ちいいことをたくさんされて、少しユリウスのことが好きになった。

———。

一人になった私に、わざわざ文句を言いきたらしい。マルグリッドが鬼のような形相で睨みつけてくる。

自分の恋人が他の女性を抱いたことが不愉快なのだろう。それは当然のことだ。

マルグリッドの言葉を聞いて、私はユリウスに対して一瞬でも好意を感じたこと、快感を覚えたことを申し訳なく思った。人のものだと分かっっておきながらそんなことを考えてしまうなんて最悪だ。

「マルグリッド様、私は……」

「言っておくけど、勘違いしないでね。ユリウスは優しいからあなただけを差別できなくて慈悲を施したに過ぎないわ」

「……………」

「私の夜伽の時はそれはもう優しくしてくれて、朝までずっと離してもらえなかったわ！ あなたとの夜伽は気が進まないって言っていたわよ。こんな制度があるから仕方ないんだって……つああ、可哀想。抱きたくもない女の寝室に行かないといけないなんて！ きつとさぞや不快だったでしょうね。私だったら死にたくなるわ」

マルグリッドは矢継ぎ早に捲し立てると、ふんと鼻を鳴らして去っていった。よほど私とユリウスの夜伽が気に食わなかったのだろう。

（言われなくても分かっているわ……私とユリウス様は不釣り合いだって。私だって、避けられるならそうしたい……でも、そう。やっぱり私との夜伽は嫌だったのね……）

昨日の夜は優しくしてもらったが、本当は嫌なのを隠していただけなのかもしれない。

貴族が体裁を保つために笑顔を作るなんて当たり前のことだ。それを優しくしてくれた、気持ちよかつただなんて、馬鹿みたいだ。

マルグリッドとはどんな夜伽をしたのだろう。私の時よりもっと激しかったのだろうか。愛する人と結ばれる時の方がきつと何倍も気持ちいいに違いない。

けれど私の意思とは関係なしに、時が経てば夜伽の日になってしまう。

マルグリッドに言われた言葉が離れないまま、その日はやってきた。

「お待たせ、フィオナ。今日はすごくいい匂いがするね。何か香油をつけているのかな」

寝室にやってきたユリウスは私の頬に軽くキスをするとギョツと抱きしめた。香油をつけた場所を探すように、鼻先を髪に当てたり首筋に当てたりしてくすぐったい。

「あ、あの……ユリウス様……っん」

「湯浴みをしたばかりだから肌が暖かいね。湯冷めしてしまうからベッドに行こうか」

ベッドに上がるとユリウスは私のネグリジエをはだけさせ、肌の上に吸い付きながら口付けを落としていった。赤い痕が肌の上に広がって、まるで彼の足跡をつけられたみたいだ。

「ん、っ♡♡んう♡あ……ユリウス様、そんなにたくさん……っ♡あつ、んう、うっ……♡」

「君は白い肌をしているからすぐに赤くなってしまふな」

「んう……っ♡」

谷間に赤い痕がどんどん増えていく。まだ少し触られただけなのに、ユリウスに触られると前の夜伽を思い出して体がゾクゾクした。

（人様の恋人で感じるなんて……いけないわ。ユリウス様はマルグリット様のものなのに……）

「……っあ、あの。ユリウス様」

「なんだい？」

「私との夜伽は、そんなに丁寧になさらなくて大丈夫です……早く、終わらせてかまいませんから」

彼に配慮したつもりだった。愛するマルグリッドに対し罪悪感を抱かないようにしてあげなくては。私は勘違いしていない、弁えていますと伝えたくもりでいた。

「……何を言っているんだい？」

「え？」

「それは、僕に抱かれるのは嫌ってこと？」

途端、ユリウスが怪訝そうに眉を顰める。

（ユリウス様、怒っている……？　な、何か言ってしまったかしら。もしかして私から伝えたからプライドを傷つけてしまったの？）

普段穏やかなユリウスが眉間にしわを寄せているところを初めて見たからか、背中に嫌な感覚が走る。

私がオドオドしていると、ユリウスは乱暴にガウンの腰紐を解いて、それを使って私の両手を頭の上で拘束してしまった。有無を言わせない態度に私は何にもできず、されるがまま縛られるしかできなかった。

「え？ え………つあの………?! 違うんです、私怒らせるつもりじゃ………っ」

「じゃあどういうつもりだったのかな。自分が何を言ってるのか分かってる？」

「きゃあ………っ!？」

ネグリジエを捲りあげられお腹を指先で撫でられる。素肌を指先で触れられるとくすぐったくて身じろいでしまう。

「んん………つく………ふうっ♡」

「丁寧にしなくてもいいってことは、もう気を使う必要はないってことだよな？ なら僕の好きなように触ってもいいね」

お腹を撫でた指先がつつ………とネグリジエを捲りながらショーツに伸びた。レースのショーツを引つ張られずり下ろされると、薄い和毛が露わになり、慌てて股を閉じる。

けれどユリウスはその前に足を太ももの間に割り込ませ、それを阻止した。

「駄目だよ。自分で言ったんだろう？ 僕はゆっくり君の体を慣らしていくつもりだったけど……君はそうじゃなかったみたいだね」

「あ、あ……つだめ……♡♡」

指先がクリトリスに触れる。突起の上をギリギリ掠めるように撫でられると、それだけでビクツと体が反応した。前回の愛撫を思い出していやらしい気持ちになってしま

う。

「く……つふう、ん♡♡んん……っ♡♡」

「フィオナ、そんなに閉じていたらクリトリスに触れないよ。気持ちいいんだろう？ なら素直に脚を開いて」

すり……すりすり♡トントンっ♡トントンっ♡トントンっ♡すりすりっ♡

「そんな、な……っ♡♡あっ!? っあ♡だ、だめ……っん、それだめ……っ♡♡やあ、ああ、ん……っ♡♡」